
五行六怪

池野さざなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五行六怪

【Nコード】

N3647I

【作者名】

池野さざなみ

【あらすじ】

退屈な毎日と自分にうんざりした砂戸賢路が巻き込まれる非日常世界系。

姫系金髪美少女（だがドS）と過保護なヤンデレ（だが男）、高飛車赤毛ロリ（だが怪力）、切れ長眼のメガネっ娘（だが腹黒）、まさかの竜人（だが男再び）に絡まれて右往左往……。

果たして彼は無事”この世”に帰ってくることができるのか？

挿絵いれちゃいました。ええ、ひどいことになってます。

前編（前書き）

この作品には満遍なくグロ描写があります。流血、食人、人体破壊等々が苦手な方は即刻お逃げください。

前編

グロ注意

一

遠くから聞こえた歓声に賢路は目覚めた。昏下がりの教室、柔らかな陽光が窓際の席に座る賢路を照らす。かみ殺した欠伸で潤んだ目を窓の外に向け、運動場でソフトボールをしている女子達を眺める。教壇上の教師が教科書を読み上げる声はぼんやりとして鼓膜まで届かない。

退屈。

手元の教科書をぱらぱらめくる賢路の脳裏に二つの文字が浮かんだ。運動場に向けていた目を教室内に戻し冷めた眼で教師を一瞥する。教科書を片手に黒板に単語の意味を書き出している教師の背中は霞のようで、溜息一つで掻き消えてしまいうさだた。

隣の男子がメールを打つ音で賢路の意識は教師から教室全体に向かう。誰も授業など聴いていない。

それもそうだ、賢路は心中呟いた。今行われている授業の内容は既に予備校で教わっている。ここにいる生徒皆が同じ予備校に通っているのは周知の沙汰だ。教師が振り返り、単語の意味を尋ねる。学籍番号で呼ばれた右斜め前の女子は化粧の手を止め気だるような声でそれに答えた。正解を言われた教師は若干悔しそうな表情を浮かべたがすぐ元の能面のような顔に戻ると教科書に眼を落とす。どうせ当てるのならもっと難しい問題にすればよかったのに、と賢路は教師に呆れた視線を送った。

何もかもが退屈だった。やる気の無い教師が行う授業、それを全く聴こうとせず各々好きな事をして暇を潰すクラスメイト達、眠気

を誘う昼下がりの陽。

形だけと机の上に出しておいたびっしり文字の書き込まれたノートに意味も無くマーカーをつけ、賢路は顔を顰めた。こんなつまらない高校に通う羽目になったのは何を隠そう自分のせいだった。県下一の進学校目指して受験勉強に励んだも空しく、賢路は第一志望校に合格できなかった。県の受験担当課の方針で住む地域によって受験できる高校の組み合わせが決められているシステムを当時は呪ったが、今思えば一重に自分の努力が足りなかっただけのことだ。そう無理矢理自分を納得させて何ランクも下の高校に通う毎日にも限界がきている。受験が終わった頃から始まった偏頭痛に賢路は側頭を抑え、眉間に深々と皺を寄せた。

「砂戸君^{スナド}、気分が悪いのかね」

教師の言葉に教室中の眼が賢路に向けられる。否定しようと口を開くより先に教師が保健室へ行くことを促し、賢路はのろのろと席を立った。あからさまな白い眼が、教室の空気が痛い。偏頭痛の続く頭を抑えふらつく足取りで教室から逃げ廊下に出ると一直線に保健室へと向かった。

横開きの扉を勢いよく開けると、丁度向かいからも人が出ようとしているところだった。鉢合わせになった養護教諭は一瞬目を丸くして賢路に道を譲った。

「砂戸君？また偏頭痛なのね」

「……はい」

俯く賢路の胸にまた、という言葉が鈍い痛みを伴って刺さった。高校に通うようになってから週に三日は偏頭痛のせいで保健室の世話になっている。四十半ばの養護教諭は表向きは気遣わしげに、けれど面倒くさそうな雰囲気滲ませて暫らく横になっていなさい、と賢路に声を掛けた。

「悪いけど、ちょっと書類を届けなきゃいけないの。一人でも大丈夫よね？」

養護教諭の言葉に賢路は頷いた。上履きから保健室専用のスリッパに履き替え中に入ると消毒液の臭いがつんと鼻をつく。窓側のベッドに腰掛けると青い壁掛け時計が目に入った。時計の針は下校時間が刻一刻と近付いていることを示している。少し治まっていた頭痛がまた激しくなり、賢路は溜息を吐いて横になった。

家に帰りたくない。

賢路の手が白いシーツを握り締める。受験に失敗してから、母は妙に優しくなった。いや、優しさを装ってより高い要求を賢路に押し付けるようになった。元々賢路に無関心だった父はより一層無愛想になり、最近は言葉を交わすことも無い。一番最後に話した言葉は何だったのか、それすら思い出せないほどに。何かにつけて自分に干渉してくる母と、一緒に居るだけで空気が痛い父がいる家よりも静かにさえしていれば誰も自分を意識しない学校のほうが居心地がよかった。

高だか受験に、それも高校受験に失敗したときで腐っている場合でないことぐらい、賢路もよくわかっていた。高校を卒業すれば大学、大学を卒業すれば就職。この後もずっと何かに挑戦して成功か失敗をしなければならぬ。父、母その他大勢の人間が通っていた、そしてこれからも通っていく道。

シーツを握る賢路の手が震えた。偏頭痛で顰めた額には薄らと汗が滲んでいる。賢路には、それに耐える自信が無かった。もしまた失敗したら？延々と”滑り止め”で、退屈な人生を過ごすことになったら？失敗に怯えながらも捨て去ることのできないちっぽけなプライドに縋り続ける自分に、自分でもうんざりしている。この偏頭痛のように定期的に寄せて返す後悔の波から逃げて消えてしまいたい。

がちゃん、とガラスの割れる音に賢路は身を硬くした。恐る恐る起き上がると被っていたシーツの上にくつものガラスの破片が落ち、日の光を浴びて煌いていた。刺すような眩しさに思わず目を背けると、隣のベッドの下にソフトボールの球が転がっているのが見

える。そこで初めてボールが窓を割ったことを認識すると賢路はベッドから身を起こしボールを拾った。振り返って窓の外を見るが、窓を割った犯人が謝りにくる気配は一切無い。

晴天の空の下で黄色い声を上げながらソフトボールを続ける女子と監督の教師を眺め、賢路は首を傾げた。窓が割れた音は彼女達にも聞こえたはずだ。仮に割れたのが他の部屋の窓でも教師が注意したりボールを取りに行かせたりするのではないだろうか。ましてここは保健室だというのに。

無意識の内に、賢路はベッドに上がり窓に近付いていた。偏頭痛はいつの間にか治まっている。じやり、という音が耳に届き鈍い痛みが膝に走った。眼を落とすとガラスで膝が切れて白のシーツを朱に染めている。慌ててベッドから降りると賢路は辺りを見回した。

まだ授業中なせいか、廊下を通る人は誰もいない。運動場から聞こえてくる黄色い歓声と自分の息遣いを除いて、保健室は無音だった。立ち尽くしている間にもぼたぼたと垂れる赤い液体がつくる斑点と朱に染まったシーツを見てうるたえる賢路の脳裏にそういえば養護教諭は何時帰ってくるのだろうと疑問が頭を擡げる。この惨状をどう説明すればいいか賢路は頭を抱えた。もういつそのことこのまま逃げてしまいたい。自分の不注意が招いた事態に苦悩している賢路の目に一際大きなガラスの破片が映る。

そうだ、と賢路は口に出して呟いていた。消してしまえばいいのだ。砂戸賢路という人間など最初から存在しなかったことにしてみれば。骨ばった手を伸ばして賢路はガラスの破片を掴んだ。視界に映る自分の手はやけに浅黒く、爪は白っぽかった。ガラスを握った手から赤い液体を滴らせながら水道へと向かう。膝関節に破片が入り込んだのか、一歩々々歩く毎にこりこりと奇妙な音がした。養護教諭が帰ってくる気配は無い。

水道の近くに養護教諭が使っていた背凭れと肘掛のある回転椅子を引っ張ってくるとそれに座り、蛇口に手を掛け捻った。流水に左手首を翳し、ガラスの刃を突き立てる。 > i 2 4 0 2 — 3 8 6 <

ぱつと紅色が透明な水の中に広がり、筋になって流れていく。細い糸筋のような紅が流れていくのを眺め、もう一度今度はすこし上のほうを切り裂いた。不思議と痛みはない。そうやっていくつか手首の表側に傷を作ると、賢路は少し考えた。これでは時間がかかり過ぎる。どうにかしてもっと量を増やせないものか。手を返し、今度は甲のほうに刃を立てる。紅色が水の中で踊り狂い、鉄の臭いが手洗い場に充満した。ガラスの破片を握る右手が震える。流れ出る紅い液体と反対に、その爪は真っ白だった。呼吸が次第に浅く速くなり、体中から冷汗が出てくる。震える右手からガラスの破片が滑り落ち、賢路は手洗い場の淵に上半身を投げ出した。

気分が悪い。

それが自分の中を流れるものを見たショックのせいか、それとも貧血のせいなのか、賢路にはわからなかった。白昼夢のようにぼんやりと焦点の定まらない視界の端々に墨が滲んだような黒い斑点が現れ、賢路の視野が狭まっていく。やがて黒い斑点が視界を埋め尽くして眼を開いているのか閉じているのかも判らなくなり、混濁した意識が遠のく中で養護教諭ではない誰かの悲鳴を聞いた気がした。

二

黒く染まった視界の中で、賢路は自分の体に感覚が戻ってきていることに気付いた。なんだ助かってしまったのか、と落胆しながらも瞼を開く。真暗な空間に、赤い布が動いているのが見えた。

「……………」

保健室でもなく自室でもない空間に、賢路は身を起こす。気絶する前は椅子に腰掛けていたはずなのに、いつの間にか床に寝転がっていたのだ。賢路の出す物音に気付いたのか、赤い布の動きが止まった。いや、布の端だ。賢路の眼が布の先を追い、赤い布を纏った人物を見とめた。

赤い布で作られたドレスを着た少女がこちらを見詰め返していた。

腰まであるゆるく巻かれた金髪はまるで自ら光を発するように輝き、それに縁取られた西洋陶器のように白く滑らかな肌を持つ顔は人形のように整って、北海を思わせる冷たく澄んだ青い瞳が賢路のようすをじっと伺っている。

突如目の前に現れた美少女に賢路はただ無言だった。相手も、何を言うでも無く古い椅子に腰掛けている。なんだ、賢路は心の中で唾を吐いた。これが俗に言う死後の世界ってやつか。

目の前の物言わぬ金髪の少女に冷めた視線を送る。これがあの世つてもものなら、随分とまたつまらないものだ。別に自分は美少女なんか望んでいない。面倒くさいこの世のしがらみから逃げるためにこの手を切り刻んだというのに、ここでもまた同じようなことが要求されるというのか。少女から眼を背け顔を顰める賢路の耳に、くすくすと笑い声が聞こえた。自分を嗤ったのかとむっとして顔を上げると、少女は扇で顔を隠し忍び笑いをしていた。

「あなたって変な人ね」

扇越しに青い目が賢路を見詰め、鈴を鳴らすような声が空間に響く。暗い表情で睨み返すと、少女は赤い手袋を着けた手で賢路を招いた。

「こちらへいらっしやいな。お腹がすいたでしょう？」

そう言う少女の前にはいつの間にか彼女が座っているものと同じ型の椅子がもう一脚と食器の乗った机が現れていた。渋々少女に近付き椅子に腰掛ける賢路に、金髪の少女は薄紅色の唇の端を上げて微笑み話し掛ける。

「あなた、お名前は？」

「……賢路」

ぼそりと呟いた後で賢路は眼を上げ、嫌悪の色を滲ませながら少女に尋ねた。

「きみは？」

「アヤカシって呼んでくださいな」

少女は言い、また扇で顔を隠し笑った。鈴を転がすような軽やか

で爽やかな声が暗い空間に吸い込まれ消えていく。奇妙な名の少女に賢路は眉を顰めた。それに気がついたのか、少女は扇を下ろし優雅に微笑むと目の前の食事を勧める。

「ここに来ればかりでお腹が空いたでしょう。どうぞ召し上がれ」
少女に勧められ、賢路はスプーンを手に取った。目の前に置かれた皿の中には灰色の肉と黒くて細長いものが入った半透明のスープが満ちている。スープを掬って口元まで持ってきた途端、賢路はそれが何なのか悟ってスプーンを取り落とした。乾いた音を立てて落ちる白いスプーンを少女の青い目が追い、次いで冷や汗を流し息を弾ませる賢路を見る。

「あら、お気に召さなかったかしら。こちらを召し上がりますか？」
輝く金髪を揺らし、極上の笑みを浮かべて少女は机中央に置いてあった銀細工の容器を開けた。アルコールの臭いが漂い、少女が銀の箸で白濁した丸い物体を取り出し賢路の前に差し出す。ひい、と声を上げそれを手で掃う賢路の前で少女は唇から白い歯を覗かせて嗤い、自分の口の中へ丸い物体を入れた。くちやくちやくと丸い何かを咀嚼する音が聞こえ、少女の喉が動く。腰を抜かして椅子の背にしがみ付く賢路に冷たい青い目を向けると少女はくすくすと笑った。
「どうして召し上がらないのかしら？こんなに美味しいのに」

少女が椅子から立ち上がり、机を廻って賢路へと近づく。口の端についた半透明のゼリーを拭う少女。その手に着けた赤い手袋はよく見ると赤く染まった白の手袋だった。まるで水に濡れているかのように重そうに、少女は真赤なドレスを引き摺り歩く。震えて歯の根が合わない賢路の肩に少女が手を伸ばし、それを避けようとした賢路は椅子から転げ落ちた。妙にごつごつした床の上を腕だけ使って少女から必死に逃げようとするが、背後から赤い手袋を着けた手が伸び、賢路を捕まえた。うわっ、と叫ぶ賢路の頬を少女の手が優しく撫で、人形のように整った顔がこちらを覗き込む。輝く金髪が垂れる赤いドレスからは、咽るような鉄の臭いが立ち上っていた。否応無しに覗かされた少女の青い瞳は冷たく澄んでいて奥に何があ

るのかわからない。

「逃げては駄目ですわ。望んでここに来たのなら、このルールを守らなくては」

薄紅色の唇を開いて喋る少女の息は生臭く、賢路は汗の流れる首を拭った。ルール？そんなもの知ったことか。第一、自分は特別”

ここ”に来たかったわけじゃない。心の中で弁解を捲くし立てる賢路を捕まえている少女は嗤い、賢路の拭った首筋にその口を近づけた。光るような金髪が賢路の体に垂れ、妙にごつごつした床にも垂れる。髪が反射する光に照らし出された床を見て、賢路は絶叫した。肉を削がれ白が露わになったもの達が賢路を支えていた。所々に残った灰色の死肉や細い糸のようなものがかつてそれが何だったのかを彷彿とさせる。床を見詰めて絶叫する賢路を嗤うと、少女は身を起こして賢路を見下ろした。

「これでわかっていただけでしたかしら？ここであなたが選べる道は三つだけ。わたしと一緒に食事を楽しむか、食事の一部になるか、わたしの本当の名を当てて次の段階に進むか……」

ぜいぜいと息を荒げる賢路を見下ろしたまま少女は扇で口元を隠す。

「あなたはわたしの食事の誘いを断った……。あとに残るのは二つの道のみ。勿論、名を当てることに失敗したらどうなるか、わかっていらして？」

くすくすと少女の笑い声が聞こえる。床のものを見ないようにひたすら暗闇を見詰める賢路の視界に仄かな明かりに照らされた少女の横顔の影が映る。美しく整っていたはず顔は口が耳まで裂け、長い牙が乱杭のように生えている。名を当てる？震えが止まらない肩を抱くと賢路は考えを巡らせた。

彼女は最初にアヤカシと名乗った。無論、それは本名では無いだろう。しかしこの状況でいったいどうすれば金髪の少女の名前など当てることができよう？賢路は暗い空間に眼を泳がせた。自分の歯がなる音が煩くて集中できない。いや、そればかりでない。目の前

の少女の無言の催促も、光が照らす彼女の恐ろしい形の影も、床を構成する彼女の餌食となったもの達も、全てが恐怖という感情を刺激し、思考能力を麻痺させている。思いつく限りの女性名が拳がったが、どれも彼女の名とは到底思えなかった。少女は扇で顔を煽ぎ、答えを今かいまかと待っている。このまま食べられてしまうのか、賢路が絶望に染まった眼で少女を見上げると、少女は端麗な顔に喜びの色を浮かべた。

「あら、諦めてしまうの。そうね、残る道がどういものか一寸体験してみるのもよろしくてよ」

そう言つと少女は身を屈め、賢路の肩に噛み付いた。鋭い乱杭の牙がぶつぷつと音を立てて食い込み、凄まじい圧力で筋肉を食い破つていく。声にならない悲鳴を上げる賢路から離れると少女は赤い液体が滴る頬を拭った。陶器のような白い肌に真紅の色がべつたりと伸びていく。

やっぱり新鮮なものが一番ですわ、と悦に入る少女を怯えた目で見詰め、賢路は後退りした。ひどくいだ、恐怖に支配された頭で賢路は考える。あのスープも、銀の容器に入っていたものも、全て賢路の前にここに来たもの達の成れの果てだったのだ。この少女は化け物だ。

舌なめずりしてにじり寄ってくる少女から逃げようと賢路はもがいた。けれど逃げようとすればするほど、まるで床が絡み付いてくるように離れない。くもの巣にかかった羽虫のように無駄な抵抗を続ける賢路を少女は扇の向うで嘲笑った。揺れる金髪と赤いドレスの向こう側には食べかけのスープの置かれた机がほんの少し見える。

> i2403—386 <

「……食欲……」

少女の笑い声が止まった。無音の空間に、再び賢路の音が響く。滝のような汗をかいてうわ言のように同じ言葉を繰り返す賢路の目の前で、少女の顔が微笑から困惑の表情へ変化していった。少女の笑い声が途絶えたことに気付いた賢路は焦点の合わない目で少女を

見据えると叫びすぎて掠れた声で続けた。

「そうか……わかった……きみは”食欲”だ」
「ち、違えますわ……！」

扇の向うで少女の青い目が見開かれる。陶器のような肌には輝が入り、薄紅色の唇からは乱杭牙が覗き始めた。光るように輝いていた金髪は急にその輝きを失い、ゆるいウェーブは落ちて黄色い髪に変わっていく。赤から黒へと変わり始めた手袋を見て少女だったものは鐘を割るような耳障りな声で喚く。

「違う！違う！嫌！認めるものか！こんなのわたしじゃない！違う！」

手袋を突き破って生えてきた黄色い爪で顔を掻くと陶器のような肌はぼろぼろと剥がれ落ち内側から灰とピンクの混ざったようなぶよぶよとした肉塊が現れる。赤黒く変色したドレスはめりめりと背中側から裂け、黄色い毛の生えた醜い肉塊が賢路の目の前で小山のように盛り上がり黒い影を落とした。

異形のものへ変貌した少女に目を円くして固まる賢路の頬に暴れる異形の肉塊が飛び散った。

「嫌！ひどい！これじゃ約束と違う！やめて！やめるおっ！」

割れ鐘のような声で叫ぶ異形のものほとんど膨らみ、足元の床が軋み始めた。ぱきぱきとものが折れる軽い音がここかしこから聞こえ、それに合わせて異形も悲鳴を上げる。増殖する肉塊から逃げようと痛みを堪えて立ち上がった賢路の後ろで少女だったものが大きく身を捻り、床に亀裂が入った。衝撃による床に打ち付けられそうになった瞬間、轟音と共に床が崩れ賢路は異形もるとも果てない暗黒の中に落ち込んでいった。

三

真黒な視界の中で、賢路は意識を取り戻した。肩の辺りに何か暖かいものを感じる。少女に噛み千切られた傷跡が痛むのかと薄らと

目を開くと、神経質そうな青年がこちらを覗き込んでいた。はつと目を覚ますと青年もびくと身を震わせて賢路の肩から手を離す。気遣わしげに様子を伺っている青年の横で床から起き上がると賢路は辺りを見回した。薄暗い天井に灰色の床が延々と広がっているだけで青年の他には何もいないようだ。先ほど噛まれた肩に触ると、いつの間にか傷が消えていた。左手の切り傷も同様に消えている。困惑する賢路の耳に優しいような青年の声が聞こえてきた。

「君、大丈夫……？」

我に返って振り返ると青年が心配そうに首を傾げていた。目があつた途端、答える暇も無く青年が質問を次々浴びせかけてくる。

「怪我はない？ 疲れてない？ お腹がすいてる？ 喉が渴いた？ 眠くない？」

「え、えつと……」

「そうだ、よかつたらばくの家で休んでいつたらどうか。ここは寒いだろう？ 家なら暖かい暖炉もあるよ、安全な寝床も、美味しいごはんも、娯楽品も、何でもあるよ」

答えるよりも先にそう捲くし立てて青年が提案し、賢路の顔色を伺った。こちらをじつと見詰める青年の目は穏やかで涼しげだが、どこか暗い印象がある。勢いに押されて頷くと、青年は嬉しそうに賢路に手を差し伸べ立ち上がるのを手伝った。

「一人で歩ける？ 背負っていいこうか？」

おぼつかない足取りの賢路を見て青年が尋ねる。灰色の床の上でふらつきながらも首を横に振ると青年は賢路の手を引いて歩き始めた。荒涼とした空間を先立って歩く青年を賢路は奇異なものでも見るようにまじまじと観察した。青味がかつた黒髪は短めに散髪しており、ひよろりと細長い体は小綺麗な服に包まれている。少々神経質そうなことを除けば、どこにでもいるような好青年だ。

無言で歩く二人の背後から、一陣の風が吹き抜けていく。寒さに思わず身を震わせると青年が振り返り励ましの声を掛けてきた。

「もう少しで着くからね」

青年の細長い指が示す先に、ちつぱけな灰色の家が見えた。黙つて頷くと青年はまた歩き始める。引つ張られるように付いて行くと次第に家が近付き、ついには玄関にたどり着いた。招かれるがままに中に入ると毛布を渡され、飲み物を持つてくるから待つていてくれと言われた。毛布を肩から被り、灰色の椅子に腰掛けて家の中を見回す賢路。家具や調度品が少なく質素でよく片付いた居心地のいい部屋だ。なんとなく自分の部屋を思い出すと、賢路は自分がいるのは”この世”ではないことを思い出した。ここもさっきの少女が居た空間と同じだ。とすると、さっきの青年は……。

嫌な考えが頭に浮かび、賢路は身震いした。急に喉が渴いてきた。そう思った途端、青年が湯気の立つマグカップを二つ持って現れた。賢路の脳裏に灰色の肉が浮かんだスープが浮かぶ。毛布を握り締め後退りする賢路に気がついた青年は不可解そうな顔を見るとマグカップを賢路に渡した。

「どうぞ。暖まるよ」

「……知らない」

目の前に差し出された茶色の液体を押し返すと青年はショックを受けたらしく目を見開くと眉を八の字にして蚊の鳴くような声で賢路に謝り、ローテーブルの上に震える手でカップを置いた。あまりの落胆ぶりを気の毒に思い、また激しい渴きにも耐えかねて賢路がぼそりと呟く。

「紅茶なら飲むけど」

暗かった青年の目にはつと光が宿り、わかった、とカップを片付けて台所へ向かう。その後を毛布を被ったまま賢路も付いて行く。小さく首を傾げる青年に賢路は無言で紅茶を淹れる様子を監視した。自分の目で見なければ安心できない。賢路の思うところなど露知らず、青年は紅茶を淹れる。いつも賢路が買っているのと同じ茶葉を使い、賢路が使っていたティーカップに良く似たカップに紅茶が注がれる。水も茶葉も器具も、おかしなところは何一つ無かった。カップに注ぎ終えた青年が振り返り、微笑みながら首を傾げる。 > i

「飲む？」

差し出すカップを受け取ると、賢路は頷いて紅茶を飲んだ。家で飲むのと同じ味がした。いや、喉が渴いていた分今飲んだ紅茶のほうが美味しく感じられた。紅茶を飲み干す様を青年は満足そうに眺めている。礼を言つてカップを返すと、賢路の腹がくうと鳴った。思わず腹を押さえ俯く賢路に青年は優しく声を掛ける。

「ああ、お腹空いてたんだね。すぐごはんつくるから待つてくれるかな？」

突如襲つてきた空腹に当惑しながら賢路は頷いた。そのまま下がつて壁に凭れ料理を作るのも監視しようとする、青年が振り返る。「ここで待つてるの？」

「……うん」

青年は少し首を傾げたがすぐに笑顔に戻ると居間に戻り、椅子と何冊かの本を持って戻ってきた。

「じゃあ、これをどうぞ。暇つぶしになるといいけど」

渡された本を見て賢路はえっ、と声を上げた。小学生のときに夢中になって読んだ古典SFだった。中学に上がった折に受験勉強の妨げになると母に捨てられてしまい記憶の片隅に封印していた本達椅子に腰掛け、青年の動向に注意しながらページを捲っているうちに、賢路は空想の世界に引き込まれてしまった。幼い頃にはわからなかった別の面白さに気付き、無心に本を読み耽る。

「ごはん、できたよ」

声を掛けられ、賢路はやっと本から顔を上げた。美味しそうないが鼻をくすぐる。出来上がったのは賢路の好物だった。食卓に促され、貪るように食事をする賢路を青年は穏やかな微笑みを浮かべて見守っている。その視線に気付いた賢路が皿から顔を上げ怪訝そうな顔すると青年は大袈裟に狼狽して何度も謝罪し、矢継ぎ早に質問を続けた。

「おかわりする？もうお腹いっぱい？眠くない？お風呂沸かしてお

「こうか？それともゲームでもする？本の続きを読む？」

何でもいいから賢路のために何かしたい、そういう雰囲気を醸し出して青年はじつと賢路の顔色を伺っている。その表情は翳りがあるもののごまでも穏やかで優しげだった。咀嚼嚥下えんげしながら賢路も青年を見詰め返す。青年の顔はどこか自分に似ている。そう賢路は思った。瞬きもせず健気にこちらの様子を凝視する青年と顔を合わせているのが気恥ずかしくなって眼を逸らすと、部屋の隅に置いてあったゲーム機に気付いた。最近発売されたばかりの家庭用据置型ゲームだ。傍には気になっていたゲームソフトが全て置いてある。隣の棚には母に捨てられるのを懸念して買えなかった漫画達が。

奇妙だ。

賢路の心に何とも言い難い気持ち湧き上がった。ここには賢路が望むものが全てある。居心地のいい部屋、大好きな本、やりたかったゲーム、欲しかった漫画、きつと買い損ねた限定もののスニーカーもあるのだろう。しかし、いったいどうして？部屋を見回して次々に欲しかったものを見つけた賢路は食卓の向かいに座る青年に視線を戻した。そこはかたなく自分に似た青年がじつとこちらを見詰めている。ああ、と賢路は胸中で感嘆を漏らした。そういえばずっと昔、自分に兄がいればいいのにと思ったことがあった。優しく、自分と仲良くしてくれて、それで頭のいい兄。

賢路はもう一度目の前の青年のことをよく観察した。一寸神経質ちよっしで過保護なことを除けば、昔望んだ通りの理想的な兄の姿がそこにあった。繊細そうな青年は賢路の瞳から好意的なものを感じ取ったのかおどおどした表情から遠慮がちな笑顔に変わり優しい声で尋ねる。

「何かぼくにできることないかな。君のためなら何でもするよ？」

自分と同じ色の瞳でこちらを見詰めてくる青年の問いを賢路は頭の中で反芻した。「この世」に居たときと同じ、現実感の無い白昼夢のような感覚が蘇っていた。ステーキナイフを握っていた手が開き、側頭を抑える。片手で頭を抑える賢路に青年はまた眉を八の字

にして椅子から立ち上がった。

「どうしたの？痛い？薬を持ってこようか？横になって休む？」

奥歯を食い縛り痛みを堪える賢路に青年が声を掛ける。その声からは賢路のことを本気で心配している様子が手に取るようにわかり、事実青年はすぐにどこかから賢路がいつも飲んでいる鎮痛剤と水が入ったコップを持ってきて隣に座り、痛む側頭をそつと摩った。薬を飲んでもいないのに痛みが和らいでいく。こめかみに浮かんだ脂汗を細長い指で拭う青年を賢路は横目で見る。

「気味が悪い……」。

ここまで自分に尽くしてくれる青年に失礼だとわかっているながら、賢路は沸き上がる気持ちを抑えられなかった。確かに理想の兄を望んだ。しかし、望んだのは兄だけではない。姉も、弟も、妹も、果てはペットの子犬さえも望んだはずだ。ここには全ての物が揃っている。なのに生物は青年しかない。

怖れの色の眼差しに気付き、青年は賢路の頭から手を引込めた。

「ごめん、ごめんね」

ほとんど囁くような声で青年はそう謝り、賢路の横で俯き小さくなった。哀れを誘うその姿に賢路の心が鈍く軋む。彼に悪気はないことはわかっている。うん、とだけ答えると青年は暗い眼をした顔を上げた。怯えるような表情でこちらの顔色を伺う青年に、賢路は居た堪れなくなつて尋ねた。

「兄さん……なのか」

青年の優しそうな顔がまた俯き、その表情が暗くなった。やっと聞き取れるような細い小さな声で、青年が呻き声を上げる。神経質そうな色白の骨ばった手で顔を覆い、青年は喉を絞るような声で喋る。

「ぼくが誰かなんて、訊かないでくれ」

「でも、」

「お願いだから、君も名乗らないでくれ。ぼくは何でも君のいうことを聞く、それでは駄目なの？ぼくたちがどういう関係かな

んで、訊くだけナンセンスだよ。知るだけ不幸だよ」

肩を震わせて喋る青年に、賢路は眼を伏せた。自分も名乗るな？
どういう意味だろう。賢路の脳裏にアヤカシと名乗った少女との会話が思い出される。そういうえば、まず自分が名乗ってから相手が名乗っていた。青年の言葉とアヤカシとの会話が脳内で錯綜し、一つの考えに辿り着く。目下で顔を覆い頭を垂れる青年を見詰めると、考えを確かめるため口を開いた。

「もしかして、俺が名乗ったらあなたも名乗らなければいけないのか？」

青年の肩がびくんと震えた。返事は無い。無言なのは否定できないからだと受け取った賢路はさらに言葉を続けようと息を吸った。同時に青年が涙目になった顔を上げ、懇願するように両手を賢路に差し伸べる。

「ああ、やめてくれ！その通りだよ、君が名乗ったらばくも名乗らなくちゃいけない」

「そのどこが不都合なんだ」

「君は道を選ばなきゃならなくなる　それがここの規則なんだ。

逃げることはできない」

道、規則……。アヤカシの言っていたことと符号する。

「道ってどんな？例えば、あなたの名前を当てて次の段階に進む、みたいなもの？」

「やめて　これ以上は訊かないでくれ！」

奇麗に整えられた髪を掻き毟って青年は左右に首を振る。その眉間に深い苦悩の皺が刻まれているのが見えたが、もう言葉は喉から出て止まらない。

「俺の名は砂戸賢路だ。あなたの名前は？」

髪を振り乱していた青年の動きがぴたりと止まった。警戒する賢路の前で髪を掻き毟っていた青年の手が力なく垂れ下がり、俯いていた顔がゆっくりと持ち上がる。

「……………変化」

穏やかで優しい顔の青年の形をした何かは、暗い眼から絶望の涙を流しそう答えた。

四

灰色の荒野に建つちっばけな家の中で、賢路ケンジは立ち尽くしていた。家の外を吹き荒れる風の音と、目の前ですり泣く青年の声が賢路の鼓膜を震わせる。自ら名前を聞き出しておきながら、賢路の心は後悔の色に染まっていた。変化ヘンゲ、そう青年が名乗ってからまるで悠久の時間が流れたようだった。実際は数十秒も経っていないのだけだ。賢路の前で頂垂れていた青年の嗚咽が止み、生気の無い声が発せられる。

「どうして……どうして名乗ってしまったの……」

椅子に座る青年の膝の上で、細い骨ばった手が拳を作る。ぎし、と音を立てて賢路の右横にある壁が揺らいだ。ぎよっとして壁を見詰めると心成しか以前よりこちらに近付いている気がする。背筋に悪寒が走るのを感じて壁から離れようと後退りする賢路の上着の裾を青年が掴む。見下ろした青年の眼窩には優しげな瞳はもう無く、虚ろな穴があるだけだった。眼を見開き息を呑む賢路に青年は何も無い眼窩から黒い涙を流し、か細い声で懇願する。

「拒否しないで……お願い……一緒に居るだけでいいんだ……否定しないで……」

青年は椅子から滑り落ちて床に膝をつくとそう嘆願した。何かを求めて縋ってくる骨ばった手に賢路は半歩後ろへ下がった。殆ど同時に家中の壁が軋み、今度は確実に部屋が狭くなる。生き物のように動く家に困惑する賢路の服を掴み、青年から何か別のものへ変貌しようとするものは言葉を続けた。

「……三つの道を……選ぶしかないんだ……。受け入れるか……拒否するか……名を、当てるか……」

賢路の眼が青年だったものを見下ろした。足元にひたひた跪くそれは骨と

皮だけになるほど痩せ細って、鳥の足のような萎びた手を賢路に差し出している。どろどろした黒い液体が流れ出る暗黒の虚を覗き返すと、賢路は唇を開いた。

「名を当てれば、次の段階に行ける。そうだろ？」

まるで自分でないような冷静な声に賢路自身が驚いた。髪が抜け落ち、皺だらけになった皮膚に覆われた青年の顔は賢路に向けられたまま動かない。この沈黙もまた肯定と受け取った賢路の耳に何重もの声が響く。

「……次に進んだって、辛いだけだよ」

外に吹き荒れる風の音ように幾重にも重なった声音が賢路の心に引つ掛かる。小さな耳鳴りと共に再び襲ってきた偏頭痛に片手で頭を抑えながら、賢路は目の前の干乾びたものに尋ねた。

「ここは何処なんだ？段階って？」

訊かれたものは静かに首を振る。疎らな髪に覆われた頭が左右に動く度、乾燥しきった白く薄い皮がぱらぱらと割れて床に落ちた。白が落ちた奥からは赤黒い液体が勢いよく溢れ、洗剤の匂いが残る服に斑を作った。折れそうな手が震え、引き裂かんばかりに賢路の服に縋る。

「お願い、ここに居て？ね？君が望むこと全て叶えるから、君が望むならどんな姿にでもなるから！」

ひゅうひゅうと喉を鳴らし懇願する声に眩暈を覚え賢路はよるめいた。流れ出る黒い液体が作った小池に足が漬かり、波を立てる。声に同調するように波の表面に無数の顔が映って、いかないでくれ、と次々に声を上げた。粘度の高い黒い液体はまるで意思を持っていくかのように漬かった足元から這い上がり、賢路の体を蝕み始める。駄目、やめて、と干乾びた手を離し骨と皮だけになったものが後退する。それに合わせて足元を覆っていた黒い液体も賢路の体から退いていった。脛の辺りに赤い染みが広がる賢路の前で青年だったものは両手で顔を隠し何度も何度もごめんなさいと謝った。嗚咽に合わせ、灰色の家の壁が軋む。

拒絶したら取り込まれるのだ。賢路は一人心中でそう結論付けた。見る間にズボンの裾が真赤に染まったが、痛みは全く感じなかった。むしろ甘い快感すら覚える。激しくなる偏頭痛を少しでも抑えようと奥歯を食い縛って首を振って、賢路はふらつきながら二、三步前に進んだ。よろめく賢路とそれを心配して顔をあげたものの眼が重なる。

自分を見詰める異形のもの、落ち窪んだ眼窩は空虚だが、こちらを気遣う様子が見て取れる。姿は変わってしまったも、それが取る行動は青年だったときと大差なかった。おどおどとした様子でこちらを見守るそれを観察していた賢路の口元が歪む。

アヤカシと違って、この青年だったものに悪意はない。心の中で賢路はそう認めた。アヤカシの居た空間と違ってここは好いところだ。それも認める。けれど、と賢路は胸中で続けた。彼の存在、それ自体が母を思い出させるのだ。痛む側頭の髪を賢路は固く握った。アヤカシのところでは思い出しもしなかったこの偏頭痛が彼の前では激しさを増していく。彼も母も、優しさという名の盾で賢路を圧迫する点で同じものだ。

眼前の異形を見詰めると、賢路は息を吸い込んだ。自分はここには居られない。賢路の決意を悟ったのか異形のもの、は体を震わせ、折れそうな細い手を祈るようにこちらへ伸ばした。哀願も虚しく、賢路の唇から言葉が紡がれる。

「あなたの名は ” 孤独 ”」

呟いた途端、賢路の足元の床に無数の輝が入り始めた。はっと見下ろすと灰色の床が細かな破片となって下へ落ちていくさまが眼に映る。手を伸ばしていたものもそれに気付き賢路の傍へ駆け寄ろうと身を乗り出したけれど、間に合わなかった。一度崩壊を始めた灰色の床は賢路の体重に負けて瞬く間に砕け散り、漆黒の闇の中へ賢路と共に落ちていく。

「賢路！」

仰向けに落ちていく賢路の耳に異形のもの、の音が聞こえ、自分が

落ちた穴から深淵を覗き精一杯手を差し伸べる姿が見えた。灰色だった部屋の中は闇の中から見ると眩しく、逆光になった影は異形ではなく元の青年の姿のように見える。次第に遠ざかる部屋と青年を眺め、まるで青年が光に包まれて昇っていくようだと思つた。

> i2405 — 386 <

どれ位の時間、落下を続けたのだろうか。青年が居た部屋の光さえも届かない、完璧な闇に包まれて賢路はふと考えた。まるで浮遊しているような錯覚さえ起こるほど長い時が過ぎ、それでもまだ次の空間に辿り着けない。このまま永遠に暗黒を彷徨い続けるのかと一抹の不安が胸を過ぎつた。

「ん？」

賢路の横で短く少年らしき声がした。誰か近くに居るのかと体を振り横を向くと、仄暗い空間の中に人影が立っているのが眼に入る。丁度自分と同じように横になっている人影の足元に地面があるのを見て、賢路は自分が既に次の空間に着いていたのだと気がついた。同時に平衡感覚が乱れ、もんどりうって床に倒れた。膝をしたたかに打ち痛みに呻き声を上げる賢路の傍へ足音が近付いてくる。眼だけそちらへ向けると、やけに上半身の大きい少年の影が物珍しそうにこちらを眺めていた。

「おいおい、何でこんなところにおまえみたいな奴が来てるんだ」
眼が合うと少年は開口一番そう言った。体を屈めて蹲る賢路に手を貸すでもなく、少年は二メートルほど離れたところで見物をしている。辺りが暗すぎてよく見えない姿の少年を睨むと賢路はのろのろと立ち上がった。おぼつかない足取りながらも背筋を立てて影を見据えると、少年は肩をぴくりと動かして笑いを含んだ声を上げた。
「ふーん。根性はあるみたいだな」

影のような少年の上半身が大きく膨らみ、賢路の顔に微風が当たると。思わず眼を見張る賢路の前で少年は声を出して笑った。指を鳴らす音が聞こえ、どこかから光が差す。照らし出された少年の姿に、

賢路は息を呑んだ。

巨大な竜翼を背中に持つ少年が不敵な笑みを浮かべて賢路の前に立ちほだかつている。少年の呼吸に合わせ滑りのある鉤爪のついた翼もゆっくりと上下し、あたりの空気を動かす。緑掛かった短い黒髪の下で爛々と輝く縦長の瞳の黄色い目、にやりと笑った口から覗く鋭く尖った牙。その姿はまるでその昔天から追放されたものを彷彿とさせた。

「俺の名は怪異^{カイイ}だ。どうやらおまえ、ここがどこなのかもわかってないまま進んできたようだな。もう大分過ぎてしまったけど俺が教えてやるよ」

賢路の意見など聞かぬまま、竜の翼を持った少年は高尚そうな表情を装うと語り続けた。

「いいか、ここは生と死の狭間だ。……おい、そんながっかりした顔をするなよ。確かに”この世”から来た連中にとっては聞き飽きた陳腐な単語かもしれないが、ここに来れるってことは場合によってはすごく幸運^{ラッキ}なんだぜ？」

少年の肩に力が入り、翼が大きく羽ばたいた。空気が下に押し出され少年の体が宙に浮く。

「ここに来れる人間ってのは本来、自分の生を全う出来なかった奴だ。一番多いのは窒息系の事故死かな。あとは通り魔による他殺とか……。おまえみたいに自分で自分の命を絶った奴は普段ならこんなところへ来ずに一直線に昇天してるはずなんだ」

「じゃあ何で俺は……」

語る少年に疑問符を投げかけるも、賢路の問いは鼻先であしらわれる。

「知るかよ。俺が言えるのは、ここに来た人間にはもう一度生を取り戻す機会が与えられるってことと、そのためには幾つかの段階を経なきゃならないってことだ」

「段階……」

「そつだ。おまえはもうアヤカシと変化の二つも段階を経てきたか

ら何と無くわかるだろ？ああいうところを幾つか通って、最後の段階まで辿り着けば生き返れるってわけだ」

「そして次の段階に進むには、その段階の主と名乗りあって本当の名を当てる必要がある……と」

物思いに耽り呟く賢路に少年はそうだ、と相槌を打った。大きな翼を上下させて宙に浮かんでいる少年を前に、賢路は腕を組み考える。なんとなく予想はしていたが、実際に面と向かって生き返れると言わると妙な気分だった。そもそも自分は”この世”から自分を消し去るためにあんなことをしたのだから、この少年の言うことを手放しに喜ぶ気にもなれない。

戸惑っているのが顔に出ているのだろうか、宙で気ままに飛んでいた少年は急に賢路の近くまで降下し、鼻先に硬い爪が生えた指を突きつけた。

「なんだその表情は？折角生き返れるってのにちつとも嬉しそうじゃないな！たく、これだからおまえみたいな奴は嫌いなんだ。説明した時間を返してもらいたいぜ」

嫌悪を露わに牙を剥き出す少年に賢路も負けじと陰惨な視線を浴びせる。どうせこいつも数ある段階の主の一人なんだろう。長居するのなら前の段階にいた青年と一緒にいたほうがまだ良かった、と賢路は胸中で愚痴を吐いた。この少年とは馬が合わない。さっさと名乗って名前を当て、次の段階に進んでしまおう。そう思って口を開いた瞬間、少年が片手で賢路の口を塞いだ。

「おっと。名乗らなくてもおまえの名前は知ってるぜ。砂戸賢路、だろ」

「……そうだけど」

何故この少年が自分の名前を知っているのか疑問を抱きつつ、賢路は口を曲げるとぶっきらぼうに答えた。少年も賢路を嗤うように口端を上げ、口を塞いだ手と反対の拳を目の前で開いて見せた。ごつごつした手のひらの上に赤い錠剤と青い錠剤が一つずつ乗っている。

「いいか、この段階は特別ルールがある。選べる道は二つだ。赤い薬を飲んで今すぐ死ぬか、青い薬を飲んで次の段階に進むか」

初めて耳にする胡散臭い言葉に賢路は少年の目を覗き込んだ。黄色の目は縦長の瞳がより細くなり敵意を露わにしている。少年が言っているのは本当だろうか。ひよっとしたら嘘を言っていて、薬の効果は逆かもしれない。いや、最悪両方死ぬ薬かも。

そこまで考えて、賢路は思い出した。自分は別に生き返りたいわけではない。少年が言うことが嘘だろうと本当だろうと、薬の作用で死のうと死ぬまいと、はたまた次の段階に進もうとも、この少年から遠ざかる結果になるのは同じだ。

爛々と輝く黄色い目を賢路は睨み返す。暫し対峙が続いた後、賢路は青い薬を掴むと口に放り込んだ。

後編 二(前書き)

暴力描写があります。苦手な方はご注意ください。

五

青い薬を嚙下した途端、賢路ケンジの体中に焼けるような激痛が走った。あまりの痛みに体を掻き毟る賢路を見る竜翼の少年の瞳がぎらつく。「甘ったれるんじゃないねえ！」

奥歯が見えるほど大口を開けて少年が罵倒の言葉を放った。その眉は吊り上り、眉の下の黄色い目は憤怒の炎を燃やしている。立っていることができず膝をついた賢路の前につかつかと歩みよると、少年は手に残っていた赤い薬を賢路に投げつけた。少年の手から離れた赤い錠剤は空間に色を散らし、紅の炎となって賢路を囲む。額からだらだらと汗を流し苦しむ賢路はこれ以上の苦痛を受けまいと這いずり逃げようとしたりたけれど、炎の手が廻るほうが速かった。紅蓮の業火に身を焼かれ声にならない悲鳴が上がる。

内と外の両方に苦しみを受ける賢路の視界に映る少年の姿が紅と橙の炎に掻き消されていく。高温に包まれ眼球が乾き、視界が白く濁る。助けを求めて少年が居たほうへ手を伸べたが伸べ返される手も無く、濁った眼球に輝が入り賢路は完全に視界を失った。

光を失った空間に賢路は倒木のように転がっていた。内側からの苦痛も、外側からの灼熱の痛みも、認知できる限界をとうに超えていて今は何も感じなくなっていた。思考することもなく襪はら襪雑巾のように横たわる賢路の肩を何かが揺する。

漫然としていた意識が次第に収束し、賢路は首を動かした。焼けて縮み上がってしまったはずの脛が眼球を覆っている感触がある。自分は消し炭になったのではなかったのかと、賢路は恐る恐る脛を開いた。幼い少女がこちらに興味を示してすぐ傍にしゃがんでいるのが見えた。紅葉のような小さな手の人差し指で賢路の肩をつつく

少女を賢路はぼんやりと眺める。

燃えるような赤毛を後ろで一つに結んだ幼い少女は緑の目を好奇心に輝かせ、目を覚ました賢路の顔を覗き込んだ。桃色に上気した頬は円く、きゅっと結ばれた小さな唇が開き子ども特有の甲高い声が発せられる。

「あなた、誰？」

舌足らずな質問に賢路はもごもごと口を動かした。痛みによるシヨックで声が出ない。喋れないことに気付いたのか、少女は口を尖らせると立ち上がりどこかへ駆けていってしまった。

夕焼けのような橙色の天井がどこまでも続く空間を散漫に眺め、賢路は思考する。あの少年の言った通り、青い薬を飲んだから次の段階に来れたのだ。思いも寄らない苦痛を味わう羽目にはなったが、とすると、先ほどの少女はこの段階の主なのだろう。彼女に名前を告げなければ……。まだ力の入りきらない体を無理矢理起こし少女が走り去った方向へ首を伸ばす賢路の背後で物音がした。はっと振り向くが紅い地面が広がっているだけで何もいないように見える。幻聴だったのだと思い眼を戻そうとすると今度ははつきりと人の声が聞こえた。

「気をつける……あの子の機嫌を損ねちゃだめだ」

しわがれた男の声に賢路は左右を見回す。勢い余って床に尻餅をつくと粘着質な音とともに赤い液体が飛び散った。床一面が濡れていることに気付いた賢路が目線を下ろすと男の声がこっちだ、と囁く。

「あなたの右手を退かしてくれ、そこに居るから」

言われて右手を見ると赤い液体の表面に幾つか泡あぶくが浮かんでいる。慌てて手を退かしそこにあるものを見た賢路は悲鳴を上げた。赤い液体の中に沈む無残に変形した男の顔は自嘲するように笑うと驚かしてすまないな、と謝ってから言葉を続ける。

「ここまで来たのならあんたも何をすればいいかわかってるだろう。いいか、あの子を怒らせることなく名乗り、名前を当てるんだ。絶

対に途中で機嫌を悪くするようなことをするな。こんな風になりたくなかったらな」

そう言う男は自由に動かせるほうの目を使って床を示した。釣られて賢路の眼も床を見る。覚醒した意識の元、視界に映る赤い液体とその中に沈む床を構成するものたちが何なのかを賢路は理解した。かつての容かたちを失い細切れの肉塊となつて蠢く彼らに、背中の毛が総立つ。

息を乱す賢路の背後から液体の上を走る足音が聞こえてきた。先ほどの少女がガラスのコップを持ってこちらへ戻ってきている。床の一部から気をつける……、と男の声が聞こえ、静かになった。震える手で拳を作り、賢路は少女と対面する。幼い赤毛の少女は満面の笑みを浮かべると手に握ったコップで床の液体を掬い、賢路に差し出した。

「飲んで」

荒唐無稽な要求に賢路の眼が見開かれ、目の前に突き出されたコップを凝視する。透明なガラスのコップの中になみなみと汲まれた赤い液体の生臭い匂いに食道が裏返る思いがした。コップを受け取るうとせず嗚咽を漏らす賢路の前で、笑顔だった少女の口端が下がっていく。

「何をしてるんだ、早く受け取って飲め！」

無言に徹していた床の男が小声で叫んだ。その声に反応して少女の緑の目がかつと見開かれ、その手に握られたガラスのコップが粉々になった。冷や汗をかいて後退りする賢路には目もくれず、少女は床の男に近付き足を上げる。

「あたしが！いいって！言うまで！喋っちゃだめ！」

一息毎に少女は上げた足で勢いよく男の顔を踏みつける。嫌な音が何度も聞こえ、赤い液体と白っぽい筋が辺りに飛び散った。男が痛みに叫び、それを聞いてさらに逆上した少女が暴れる様子を震える体を抱いて賢路が見詰める。一頻りひんり床のものを踏み潰した後、少女の眼が今度は賢路を捉えた。自分も暴力を振るわれると察知した

賢路はすぐさま床に顔を近付け、鉄の臭いがする液体を手で掬うとそれを飲んだ。細かく震える手は思うように動かず液体が指の間から流れ落ちる。割れたガラスの破片が指に刺さり、飲み込んだ喉にも刺さったが賢路は泣きながら液体を飲み続けた。時々吐き戻しながらも赤い液体を飲む賢路を少女は暫らく無表情で見詰めている。急に、地面に這い蹲る賢路の背中を眺めていた少女がにんまりと無邪気に笑った。軽い足取りで駆け寄ってきて賢路に跨り、お馬さんだー、と少女ははしゃぐ。

「前にすすめー」>i2406—386<

舌足らずなあどけない声で少女が言い、賢路の腹を足で挟む。めき、と骨の軋む音が聞こえ腹部に激痛が走った。呻き声を上げて床に肘をつこうとする賢路に、少女は早くはやく、と若干苛ついた声でよりきつく腹を締める。痛みと恐怖に震えながら、賢路は赤い液体の上を進んだ。ガラスの破片が手だけでなく脛にも刺さり、濁った赤に鮮やかな赤が混じる。どれくらいの時が経ったのだろうか、ひたすら背中に乗る少女の命令に従って橙の空間を這いまわった後、少女はやつと満足したらしく賢路の背中から降りた。かちかちと歯を鳴らす賢路の頭をぽんぽんと撫でると幼い赤髪の少女は大きな声で独り言を発する。

「どんな名前にしようかな」

「……俺は……賢路。砂戸賢路」

歯の根の合わない口でやつとそれだけ言うと、少女の鼻に皺が寄った。紅葉のような手が賢路の髪を掴み、ぶちぶちと音を立てて引き抜いた。

「名前はあたしが決めるの！あなたにきいてないの！」

痛みに声を漏らすと少女はまた賢路の頭から髪を一掴み引っこ抜いた。黒い髪の根元についていた赤と黄色の組織が一緒にごっそりと剥がれ、赤い液体が飛び散る。ひい、と叫ぶ賢路の顔は涙と赤い液体で汚れ、手足がびくんと痙攣する。頭を庇って丸くなりすすり泣く賢路を見下ろす少女は手を振り上げた。

「泣いちゃだめなの！わたしが遊んであげるときは！ずっと笑ってなきゃだめ！」

振り下ろされた少女の拳が賢路の右肩を砕く。嘆きの声を上げてのた打ち回る賢路を、少女は容赦なく打ち続けた。肩が、腰が、手足が、少女の小さな拳により粉々に砕かれていく。何度も振り上げられる拳の下で、賢路は泣きながら許しを請うた。ごめんなさい、ごめんなさい、と繰り返す賢路に少女は手を止め、冷やかな声を可愛らしい唇から発した。

「……もういいや。こんなの要らない」

そう言つと少女は短い足で賢路の腹を蹴った。四肢の壊れた賢路は成す術もなく衝撃を受けて後方へ飛び赤い液体を吐く。うつ伏せになったまま咽る賢路を冷めた眼で見下ろすと少女は口を開いた。紫色の煙と共に抑揚の無い声が空間に出される。

「あたし、もののけ。ここに来た人はあたしの玩具になるの。でも、あんたは要らない。三十秒あげるから、ずっとそこに転がってるか、あたしの名を当てるか決めて」

高飛車な態度でそう科白を吐くと、少女はいーち、にーい、と数え始めた。虚ろな目で床を見詰める賢路は声を出そうと唇を動かした。口から赤い液体の混じった唾液が垂れるだけで声が出ない。ひゅっひゅっ喉の下に開いた穴から空気の漏れる音が聞こえ、絶望が賢路を襲った。

声を出せずにもがく賢路を見下ろし、少女は淡々と数を唱える。

ここで永遠にごみのように打ち棄てられるのかと賢路の眼に涙が滲んだその時、賢路の下の床がざわざわと蠢き始めた。赤い液体に沈んでいたふやけた手が持ち上がり、賢路の喉下を開いた穴を塞ぐ。うっ、と痛みに声を上げた賢路は再び声が出せるようになったことに驚いて自分の喉に触れる手が繋がる先を見た。赤黒く濁った液体の中から無数の眼がこちらを見詰め返している。その殆どが元の容も分からないほどに崩れていたけれど、確かに表情は伝わってきた。彼らもまた賢路のように彼女に挑み、そして敗北したのだから。無

数に折り重なる崩れた肉塊達に思わず頷くと、賢路は口を開いた。

「我俣」だ　君は」

うつ伏せのまま名を言うのと、少女の数を唱える声が止まった。橙と赤の空間に独特な甘くほろ苦い臭いが漂い始める。生あるものが嫌悪するその臭いを嗅いで、賢路は顔を顰め息を止めた。液体に反射して映る幼い少女の顔は溶けるように崩れて肉片が床に落ちた。堰を切ったように、少女の体から次々と肉片が崩れ落ちる。変色した肉が漬かったところから液体は赤から黒へと移っていく。苛烈さを増した臭いが目を刺激し、賢路は瞼を強く閉じた。真暗な中、蠢くなにかが体を包むことだけが感じられる。

生温い液体の中に引き吊り込まれ、賢路は身を硬くした。数秒と経たないうちに賢路を包み蠢いていたもの達の感触が離れていき、液体から顔が出る。息を吸って揉みくちやになった頭を振り目を開けると、白い肉塊達が暗黒の闇の中で遠ざかっていくのが見えた。絡み合う肉塊の一つがこちらを向き、その唇が動く。声は聞こえなかったけれど、何と言ったかは想像がついた。去り行くひとだったものの群れにありがとう、と呟いて、賢路は深い闇の中を落ちていった。

漆黒の闇の中で、賢路は意識を取り戻した。燃えるような四肢の痛みは何時の間にか引き、喉の穴も塞がっている。どつと襲ってきた疲れにそのまま眠ってしまいそうだった。重い瞼を無理矢理開けると見覚えのある影が空中に浮いている。

「なんだ、しぶとく逃げ延びたのかよ」

ちっ、と舌打ちの音が聞こえ、ばさばさと翼が羽ばたいて出来た空気の流れが横たわる賢路の上を撫でていった。怪異カクイと名乗った竜翼の少年が寝転ぶ賢路を見下ろしている。少年の姿を見止めた賢路も顔を顰め、すぐに身を起こして立ち上がると真正面から少年を見据えた。

「……さっきよりはマシな顔つきになったみたいだな」

睨み付けられても動じずに少年は賢路を頭からつま先まで眺め回し悔しそうに言う。ゆっくりと下降して黒い床に降り立つと、巨大な翼を畳んで賢路に歩み寄った。手を伸ばしてやっと触れるか触れないか位の距離で止まると、少年はまた拳を差し出す。開かれた手のひらには赤と青の錠剤が一つずつ乗っている。

「さあ選べ。赤い薬を飲んで死ぬか、青い薬を飲んで次の段階へ進むか」

今度は躊躇うことなく、賢路は青い錠剤を選んだ。ぎゅっと口を真一文字に結び、縦長の瞳の少年を睨む。少年もふてぶてしい表情で賢路を睨み返し赤い錠剤を懐に仕舞った。誰が何と言おうと、この少年にだけは負けたくなかった。絶対に生き返ってこいつの鼻を明かしてやる、賢路はそう心に誓う。

互いに無言で睨みあつたまま、賢路は錠剤を飲み込んだ。それを見届けた少年は翼を広げ、暗い空へ飛び立つ。激しい風に髪を乱されつつ賢路は天を仰いだ。少年が上へ昇るのとはほぼ同じ速度で足元の床が下降していく。二人の距離に比例して抗うことの出来ない眠気が増し、視界がくるくると廻る。片手で目を擦る賢路の足が纏れ、ぐらりとよろめいた体は重力に逆らえず背中から床へ倒れていった。

眩しさで目覚めると、真青な景色が視界に飛び込んできた。もしや生き返ることが出来たのかと起き上がったが、よく見ると青い天井と青い床がどこまでも続く今までの空間と大差ない場所だった。期待していた分肩が下がり、賢路の唇から細い溜息が漏れる。いたい、どれだけの段階を進めば生き返ることができるのだろう。空間から空間へと移動する度に酷い目に合うのは正直なところもう懲り懲りだ。アヤカシ、変化、怪異、もののけ……ここまで来るのに出会った異形のもの達から受けた仕打ちのせいで賢路は身も心も疲れきっていた。疲労からくる倦怠感にぐったりと体を床に投げ出す。耳鳴りが聞こえるほど、青い空間は静まり返っている。どうせまた空間の主のほうから自分に接触してくるだろうと高をくくった賢路

は静かなことを幸いに仮眠することにした。自分は今死んでいるのに疲れや眠気を感じるのはおかしいことだと思いつつ、うとうととまどろむ。

曖昧な意識の中で、賢路は色の付いた夢を見た。自分の家によく似た場所で食事をしている夢だ。食卓には父と母と、何故か変化ヘンゲと名乗ったあの青年が座っている。擦りガラスを通して見えるような視界は細部がぼやけて皆の表情が読めない。味のしないスープを飲みながら三人の顔を順に眺めていると、母が席から立ち上がった。聞き飽きた猫なで声で何かを喋っているけれど水の中のように音が分散してよく聞こえない。

母は意味不明な言葉を喋りながら賢路の横まで歩いてきた。その手にはどこから出したのか、本らしき四角いものが握られている。スープを飲む手を休め何が起こるかを見ていた賢路の前に、母が四角いものを広げて見せた。ぼやけた視界のせいで文字は滲んで読めないが、挿絵を見るに幼い頃愛読していた童話のようだ。黒のインクだけで描かれた女の子と兔が賢路の記憶の中で寸劇を始める。空想に耽る賢路に母は急にヒステリックな声を上げると広げていた本をびりびりと引き裂いて、頁の破片を賢路の皿の上にはら撒き始める。突然の奇行に賢路は一瞬固まったが、すぐに母の手から本を取り返そうと立ち上がった。爪が食い込むほどの力を籠めて母の手を引き剥がそうとするけれど、一向に本を離そうとしない。その間にも本は破かれ、燃え尽きた灰のように頁の破片がひらひらと食卓に待った。離せ！と賢路が叫ぶと、母も何か叫び返す。隣に座る変化がおろおろと揉み合う二人を心配するのが眼の端に映った。

仲裁に入ろうともせずただうろたえるばかりの変化に、賢路の心が苛立つ。こいつはいつもこうなんだ。自分の意見も言わず、ただ周りにあわせて右往左往するだけ。口先では自分の味方だと言うくせに母に逆らってまで庇うこともしない。

唇を噛んで拳を握る賢路の耳に母の上げる甲高い奇声が入る。本

を握る手に力が入り、べり、と音を立てて本は真つ二つに裂け、同時に賢路の中の何かも裂けた。破けた頁の浮かぶスープの入った皿を掴むと賢路はそれを母の頭に振り下ろした。母が悲鳴を上げたが、賢路の耳には人間の声として認識されなかった。血管が浮き出るほど強く握った赤のついた白い皿を、何度も何度も母の頭に振り下ろす。すぐ傍で変化が泣き叫ぶ声が聞こえたが、一度爆ぜたものは止まらなかった。奇声とも悲鳴ともつかぬ母の声と共に、自分でも気付かぬうちに賢路は罵声を吐き出していった。ぼやけた視界の中で赤く染まった母は動かなくなり、賢路はなおもそれを形が無くなるまで殴り続ける。

声が枯れるほど罵りの言葉を吐きながら、賢路は涙を流し母だったものに拳をぶつけ続けた。白い皿はとうに割れ、手の骨が砕けても止まらない。父は、父はどこにいるんだ。泣きながら賢路は思った。いつも感情を表さない父。賢路が何をしようとも、褒めることもせずたしな窘めることもせず一切の関わりを持つことを許さなかった父。今も無表情で我関せずと食事を続けているのか。どうして何も言わないんだ。目の前であんたの息子とその母が惨事を繰り広げているというのに。

悔し涙を流しながら、賢路は折れてぐにゃぐにゃになった手を振り上げた。真つ白な居間に赤い点が弧を描く。最後の一撃とその手を振り下ろした瞬間、賢路の体を冷たい感覚が貫いた。腰の少し上辺りからじわじわと温かい液体が染み出ていくのがわかる。足から力が抜け、賢路は床に座り込んだ。溢れ出る赤い液体に体温を奪われ、賢路は自分の体が急速に冷えていくのを感じた。倒れる賢路の体を暖かい手が抱き止める。ごめん、ごめんね、と耳元ですすり泣く変化の声が聞こえ、赤く染まった泣き顔が見えた。涙を流し変化が弁解を続けたけれど、何を言っているかよく分からない。首の力が抜けて視界が傾くと、変化の背後に黒い丸いものが赤い液溜まりの中に転がっているのが見えた。父さんだ。それだけ思うと視界が暗転し、意識が遠のいた。

眼を覚ますと、賢路は眼頭に指を当てた。ひどい夢だ。どうしてあんな夢を見たのだろうか？青い天井を仰ぎ青い床に横たわる賢路は思いを巡らせた。無限に広がる青い空間は夢を見る前同様静まり返っている。体を起こして胡坐をかくと、賢路は空間を見回した。地平線が見えるだけで他には何もない。

あんな夢を見たせいもあってか、賢路の胸に不安が渦巻いた。もしかして、ここには主が居ないのではないか。問答をすることもできずここに閉じ込められてしまうのではないか。自分で考えたことに自分で怯え、賢路は立ち上がった。何か行動を起こさないと不安に押し潰されそうだ。とりあえず今向いている方向に歩き始める。柔らかな青い床は歩く衝撃を吸収し、足音さえも聞こえない。

どれだけ歩いてても、青に満たされた視界には何も映らなかった。ひたすら静寂であり続ける空間に賢路の心は益々焦れる。歩く速度が次第に速まり、賢路はいつの間にか走り出していた。

「おーい！」

全力疾走しながら賢路はあらかぎりの声で叫んだ。口から出た声はあつという間に広大な空間に吸い込まれ木霊さえも返ってこない。

「俺の名前は砂戸賢路だ！誰かいないのか？返事をしてくれ！」

大声でそう言うと、賢路は足を止めた。早鐘を打つような鼓動に胸を押さえ膝に手をつく。首筋から垂れた汗が青い床に染みを作った。自分の荒い呼吸音しか聞こえない空間に、やはり誰もいないのだと賢路は目を潤ませる。巨大な空間にただ一人、ちっばけな自分を思うと涙が出てきた。床に座り込み汗まみれの顔を覆い、賢路は嗚咽を漏らした。次から次へと溢れ出る涙と汗が青い床に水溜りをつくる。

真赤になるほど泣き腫らした目が正面から伸びる影に気がついたのは泣き出してから随分後のことだった。現れた人影に賢路ははつと顔を上げる。重そうな本を片手に持ち、細い眼鏡を掛けた少女が

こちらを迷惑そうに見詰めていた。泣いているところをずっと見られていたのかと涙で汚れた頬を染めて顔を背ける賢路に少女は手を伸ばす。

「あなたの読んだ本、私の趣味に合いそうね」

少女の手が賢路の胸に触れ、その隙間から何冊かの本が現れた。夢の中で見たあの童話も混じっている。ぽかんと口を開ける賢路の前で、少女はぱらぱらとそれらの本を流し読みする。眼鏡の奥に見える切れ長の黒い瞳は一心不乱に本を眺め、細面の白い顔を縁取る黒髪は二つに結わえられ肩を流れて腰あたりで揺れている。 > i 2
407—386<

「これとこれが面白かったわ」

流し読みを終えた少女が束ねられた本の中から二冊を抜き取り、残りの本を取り出した時と反対に賢路の胸へ押し込んだ。本を抱え、そのまま透けて消えそうになる少女に慌てて賢路は名乗る。

「あのつ、俺　砂戸賢路っていうんだけど」

すでに半透明になっていた少女は鬱陶しそうな表情で振り返ると片手で眼鏡のズレを直す。

「ああ、道を選びたいのね。いいわよ。私は魔物、あなたが選べる道は三つ。私の書庫になるか、塵となって消え去るか、私の名を当てて最後の段階に進むか」

最後、という言葉に賢路の胸が鳴る。眼鏡を掛けた少女は抱える本の頁を退屈そうに捲った。

「あなたみたいな五月蠅い人がいると本を読むのに集中できないのよね。ヒントを上げるからさっさと出て行ってくれないかしら。持っている本もこの二冊以外は時間があっても読みたくなるような内容じゃなかったし」

淡々と少女は語り、賢路を見詰めた。有無を言わさないその視線に賢路は息を呑み頷く。ぱたん、と本を閉じると少女は可憐な唇を開いて言葉を紡いだ。

「私、自分のためになることしか興味が無いの。それ以外のことは

どうだつていいわ。勿論自分に架せられた義務はきちんと果たすけど、それ以上のことはどうなつても知るものですか」

一息に少女は言い、細い眼鏡の奥から切れ長の瞳を賢路に向けた。それを催促と受け取つた賢路が口を開く。

「君の名は”利己”……かな」

「正解」

淡白な声で少女が認め、半透明だつたその姿が細かい粒子になり霧散していく。灰色の霧が賢路の周りを覆い、機械的な雑音の混じつた少女の声が入る。

「面白い本をくれたお礼にちょっとだけ忠告してあげる。最後の道はよく考えて選ぶのよ。でないと、ずっと後悔することになるから」
「うん、わかつた」

声のする方向に頷いてみせると、灰色の霧はどこからともなく吹いてきた風に飛ばされて賢路の前から消えていった。足元から沸き上がる濃い闇に賢路は身を硬くする。いよいよ最後の段階へ着くのだ。どんな異形が待っているか不安を感じつつも、同時に次を越えさえすれば生き返れるのだと浮いた気持ちもある。触れている感覚さえある濃厚な闇に、賢路は身を投じた。

深い闇に包まれて、賢路はどこまでも降りていった。下に向かうほど深くなる闇の濃さは、最初は重力に抵抗する程度だったものが手で掻き分けなければ下降できないまでになった。息を吸い込もうとしても、水の中にいるように濃厚な闇に邪魔されて呼吸ができない。空気を求め、賢路は闇を掻き分け続けた。急に、手に掛かっていた負荷がふつと軽くなる。取り巻いていた闇が薄まっていき、賢路は緩やかに床に着地した。

頭上に渦巻く暗黒の空と漆黒の床。真暗闇の中で巨大な生き物の息遣いが聞こえ、生暖かい空気の流れが賢路の頬を撫でる。床を踏締める足に力を籠めると、賢路は凜とした視線を闇が覆う空間の主へ向けた。羽ばたく音と共に生まれた気流が辺りの闇を払っていく。やはり、と賢路は目の前に現れた主の姿を見て心の中で呟いた。竜の翼を持った緑髪の少年が空中に浮かぶ漆黒の玉座に深々と腰掛け、賢路を見下ろしている。少年の頭には先ほど会ったときには見受けられなかった何本かの小さな角が環状に生えていた。きらきらと輝く黄金のそれは、まるで王冠を思わせる。少年の顔には見たことも無い異国の言語が刻まれていた。

「……来たのか」

少年の唇が開き、言葉が奏でられる。流れる吐息は風の奔流となり空間を震わせ、蠢く闇が慟哭した。漆黒の玉座の肘掛に置かれていた逞しい腕が持ち上がり、黒々と艶めく鋭い爪が賢路を指した。

「さあ、名乗るがいい。三つの道をおまえに示してやる」

仰々しい言葉を吐く少年を賢路は訝しげに見詰める。闇を統べる王者のような少年は、とてもほんの少し前まで賢路と小競り合いをしていた同一人物とは思えない。戸惑っている賢路の後ろで少女の

声が聞こえた。

「鈴橋青子です」

驚いて振り向く賢路の眼に赤いワンピースの少女の姿が映る。胸の前で祈るように手を組む少女の円らな瞳は一心に玉座の上の翼の生えた少年を見詰めていた。ばさりと翼が空を一掻きする音が聞こえる。

「俺の名は怪異^{カイイ}。おまえの名により、おまえの前に三つの道を作るう」

少年の鱗の生えた手が少女に向けて広げられ、床を漂っていた闇を退かせて文字通り道を創った。三本の道はそれぞれに赤、青、黒と色が付き、黒い道は真直ぐに玉座へと伸びている。後退りする賢路と反対に道の前まで進み出た少女に、竜の翼の生えた少年は頭上の角を煌かせ言葉を続けた。

「赤い道は全てを終わらせる道。”この世”からもここからも消えておまえの魂は安息を得るだろう。青い道は命を得る道。一度は潰^{つぶ}えた泡沫の命を再び得て”この世”に帰ることができるだろう。黒い道は力を得る道。人の容を棄てて俺の一部となるならば悠久の間と自由にできる空間を与えてやる」

翼が大きく動き、少年は眼下に佇む少女を見詰めた。細長い爬虫類の瞳を持つ黄色い目に、少女が歩き始める姿が映る。少女がどの道を選ぶのかと凝視する賢路の前で、赤いワンピースを着た少女は躊躇いもせず黒い道を選んだ。ひらひらと揺らめく赤い裾から覗く折れそうな白い足が早足で少年が座る玉座への道を登っていく。少女が漆黒の玉座まで登り詰めると、少年は立ち上がって彼女を迎えた。二枚の翼が少女と少年を覆い、その周りに濃い闇が立ち込める。闇が薄らぎ晴れた頃には、翼を広げた少年がいるだけで少女の姿はどこにも見当たらなかった。目を見開いて冷や汗をかく賢路を少年の黄色い目が捉える。

「どうした。怖いのか？」

挑発とも取れる少年の言葉に、賢路は肩をいからせてぶっきらぼ

うにそれを否定する。

「……別に」

ふ、と少年は鼻で笑い竜翼を広げた。疾風が闇を掻き回し、賢路の前から道が消えていく。膝下まで闇に漬かる賢路に、少年は玉座の前から伏せた手を翳す。

「名乗れ。おまえにも道を示してやる」

「……砂戸賢路、だ」

自分を見下す少年に闘志を燃やしながら賢路は名乗った。少女の時と同じように、少年は床に広がる闇を拓き道を作った。曲がりくねった赤、青、黒の三本の道が現れる。少女のために出来た道よりも若干彩度の低い道の前に賢路は進み出た。道の先にあるものはさつき説明した通りだ、好きに選べ、と少年の言う声が聞こえた。足に絡みつく闇を振り払うと賢路は一步踏み出す。踏締めた青い道は硬く、その先は闇に霞んでいる。そのまま数歩進んで振り返ると竜翼の少年が宙に浮かぶ漆黒の玉座からこちらを眺めている様子が見えた。その顔は闇に包まれ、表情は見えない。

天空に翼を広げ闇の中に君臨する少年を賢路は不思議な気持ちを抱えて見詰めた。謂れもなく罵られ拳句の果てには火炙りにまでされたというのに、少年に対する闘争心は勢いを潜め郷愁にも似た感情が胸に湧いていた。漆黒を背景に悠然と翼を広げるその姿が、昔読んだ本の挿絵に似ていたからだろうか。顔の見えない少年の翼が大きく羽ばたいて咆哮が空間を揺らす。それに背中を押されるように、立ち止まっていた賢路は闇へと続く青い道を再び歩き出した。

> i 2 4 0 8 — 3 8 6 <

暗闇の中、自分の名を呼ぶ声がして賢路は意識を取り戻した。冷えた自分の頬を誰かの暖かい手が包んでいる。乾いた唇から息を吸い込むと賢路は瞼を震わせ目を開いた。サイレンの音が聞こえる。

焦点が合い始めた賢路の眼に赤い夕焼けが映る。ああ、帰ってき

たんだ、と賢路は心の中で呟いた。安堵の気持ち体が暖かくする。まず父さんと母さんに謝って、それから自分の気持ちを素直に話そう。今度こそは自分も納得できる道を進むんだ。随分昔に忘れてしまっていた穏やかな気分で賢路は夕焼けを眺めた。どたばたと走る音や叫ぶ声で辺りは騒がしい。ふと、賢路はここが学校でないことに気付いた。力の入らない体を無理矢理起こした賢路の眼に真赤な光景が飛び込む。

夕焼けだと思っていたのは、夜空を照らす炎の色だった。藍の空を染める紅蓮の炎に包まれて、見慣れた我が家が燃え盛っている。絶句する賢路の肩に誰かの手が触れ、動いては駄目だ、と声がした。振り返ると何かの制服を着た男が険しい顔で賢路の肩を引き止めて首を振っている。男の視線に釣られて自分の腹部を見ると、真白な布を鮮烈な赤が染めていた。生々しい色に手の力が抜け、担架に背中を預ける賢路の耳にそつちの子は、と男が尋ねる声が入る。視界の先で、訊かれた男が首を振るのが見えた。男の後ろに置かれた担架から覗く顔に、賢路の瞳孔が広がった。

「え……？なんで……」

煤に汚れ、所々に火傷を負ってはいたけれど、賢路はその顔に見覚えがあった。緑がかった黒髪に生意気そうな口。閉じられているその目の色は黄に違いない。怪異カイイと名乗ったあの少年が、生気を失った顔をして担架に横たわっていた。友達を助けに行って死んでしまっなんて可哀そうに、と制服を着た男達に近所の住人が嘆きを呟いている。呆然としている賢路の耳に、信じ難い言葉が飛び込んできた。

「あそこの長男、前々から一寸神経質なところがあったんですよ。よく父親と口論してるのが聞こえてたんで、危ないなあとは思ってたんですけど……まさか親を殺して弟と心中しようとするなんて……」

ぼつぼつと語られる近隣住民の言葉に賢路は耳を疑った。担架を握る手に力が入り身を起こす賢路の前で住人と男達は会話を続ける。

「……それで、両親を見かけなくなっただのは何日位前からですか？」
「ええと……かれこれ五日位かしら。弟さんはメールでその彼と連絡を取り合っていたみたいで、うちに彼から連絡が何度か来てはいたんです」

「でもまさか本当に人が死んでいるとは思わなかった……と」

制服姿の男が口角を下げて言うと、住人は後悔の色を背中に滲ませてはい、と頷いた。嘘だ、違う、と一部始終を聞いていた賢路の鼓動が速くなる。自分に兄弟は一人もいない。担架の端を握る賢路の拳が白くなり、そんなはずない、と思わず口から反論の言葉が飛び出した。

「だって、だって俺一人っ子なんだ。ずっと父さんと母さんと俺の三大家族で暮らして……」

自分を見る制服姿の男達と住人の憐憫に満ちた眼に賢路は言葉に悶^{つか}える。やめろ、そんな眼で俺を見るな。制服の男が宥めの言葉を口にしながら近寄ってきて賢路の肩に触れた。それを手で掃うと賢路は右手で側頭を握る。きつとまた偏頭痛が始まる、そう思って頭を抱えようともう片方の手を上げようとした賢路を襲ったのは胸の痛みだった。訳が分からず胸を押さえて蹲る賢路の近くで住民があの子は狭心症の気があるんです、と男達に説明している。何もかもが上手くいかなくて頭がおかしくなりそうだ。浅い呼吸を繰り返す賢路の頭に、左手の傷のことが思い出された。顔を上げると、賢路は彼らに必死に話しかける。

「そつだ、学校。学校に俺の出席が記録されてるだろ？ほら、今日保健室で手首を切った傷がここに」

引き攣った笑顔を浮かべながら賢路がこちらを見る人々に左手を差し出す。視界に映るぴんと伸ばされた左手首に傷は無く、代わりに鎖が途中で切れた手錠が嵌められていた。驚きの余り息が止まる賢路を見る人達の眼が痛い。違う違う、こんな間違ってる、と痛み胸を押さえる賢路のこめかみを汗が流れ顎から滴った。もついいから、と横に立つ制服の男が賢路の背中を摩って慰めの言葉を掛け

る。手首に光る手錠を見詰め、賢路は体の震えが止まらなかつた。そんな莫迦な。せいぜいと息が漏れる口から齒が鳴る音が聞こえる。神経質な長男、それは変化^{ヘンゲ}のことか？でもあれは生と死の狭間で見た夢で、保健室で起こったことが現実なのに。

男達が動かなくなつた少年の体を担架から下ろし青いビニールの袋に詰める作業が賢路の眼に入る。ちらりと見えた少年が黄色い目を開いてこちらをにやりと笑つのを賢路は見逃さなかつた。

「ほら！」

賢路が袋に詰められる少年を指差し声を上げる。

「わかつたぞ！全部おまえが仕組んだことだつたんだ！これは夢だ！やめろ、袋を閉めるな、そいつはまだ生きてる！離せ！怪異^{カイイ}が俺を嗤つてるのが見えただろ？なあ！」

担架から転げ落ちないように羽交い絞めにされながら、賢路はひたすら叫んだ。遠くで誰かが可哀想に……と呟いた。賢路は必死に皆に自分が体験してきたことを語つたが、耳を貸すものは誰もいなかった。やがて白い車がやってきて賢路を大きな建物へ連れて行き、賢路は狭い部屋の中に閉じ込められた。髪を振り乱し何度も同じことを繰り返し喋る賢路にやがて人々は本来の名前とは別の名で彼を呼ぶようになった。

バケモノ
化物、と。

後編 三（後書き）

「ご愛読ありがとうございました。

これにて終了です。

これ以降あとがきとなりますので読むと余韻をぶち壊される危険があります。

（壊されるほどの余韻も無いとは思いますが……）

で、書き終わったあとで気付いたんですがこれって言うほどBLじゃないしホラーでもないですよー。かと言ってじゃあどんなジャンルかと訊かれると答えに詰まるんですが……。BLキーワードを外しちゃってもいいのかなーと思ったりしてます……。（もっと濃ゆいやつを書こうと思ってるので）

最後に主人公発狂しちゃいましたが、まあ生き返れたからハッピーエンドですね！

もともと遙か昔に考え付いたネタを元に4日で書き上げるなんつーお馬鹿なことをしてしまったので誤字脱字、文法間違いが非常に多いです……。いや、非常っていうか、常に日本語は不自由なのですが。

途中から明らかに話の方向が変わってますが、それは途中で設定を書いた紙がもう一枚見つかったためです。マトリックスレポリションズが流行ってたときにノリノリで書いたネタなんているマトリックスから引用してます。

あ、あと最近知ったゆめにつきからも沢山影響受けました。変化

の容姿はセコムマサダ先生をイメージしています。

以上の二つの作品におとぎの国のアリス、サイレントヒルシリーズ、B級ホラー映画などなどのエッセンスを加えて二十倍に希釈してできたのがこの作品でした。

見つけた設定に忠実に書いたのならもっと別の終劇が見れたのですが、何にせよ発見したときにはもう半ばまで書きちゃったので……。ねじ込める設定は無理矢理ねじ込んで、あとは野となれ山となれ状態でした。（そして焼け野原になった）

だって、ね。偏頭痛持ちのひねた主人公の性格が急にクラスメイトと馬鹿やって青酸カリ飲んじゃったよ！とかいう天然お馬鹿キャラになったら困るじゃないですか。ええまあ、困るのは書き直す自分だけなんです。

そんなこんなでくだくだになって、ついにはタイトルと内容でリンクしてるところが通し番号の6ぐらいしかなくなっちゃいました。落ちも意味不明です。

でもとりあえず完結できたことに満足です！ここおかしいよってところがあつたらばしばしば指摘してやってください！技量の限り頑張って直しますので！

以上あとがきという名の言い訳でした。

ここまで読んでくださった皆様ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3647i/>

五行六怪

2010年10月8日15時31分発行